

技家(技術)部会だより

発行日 令和4年3月
 発行所 富山市千歳町1-5-1
 富山県中学校教育研究会
 編集責任者 柿埜 哲男
 題 字 金山 泰仁 先生

「流行」の波にのまれず、波にのる

主任指導主事 赤塚 貴紀

今年、中学校の教育現場は大きな変化の年だったことでしょう。その要因となった「流行」のキーワードを5つ挙げてみます。

- ①新学習指導要領の全面实施による「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
- ②学習評価における3観点への変更
- ③授業のねらいを明確にし、「指導と評価の一体化」を図った指導と評価の計画の作成
- ④GIGAスクール構想の実施の前倒しによる1人1台端末と高速Wi-Fiの整備
- ⑤「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

「主体的・対話的で深い学び」の解釈に時間をかけ、ようやく噛み砕きかけたところに、「個別最適な学び」や「協働的な学び」というキーワードの登場。これらの言葉の関連性を再確認しておられる先生方も多いのではないのでしょうか。

個々のキーワードの説明は省きますが、これらは全て「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業へ、育成したい資質・能力へとつながります。そのためには、まず先生方お一人お一人が「学習指導要領解説」や「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」等をしっかりと読み解くことが必要です。そして、先生方皆さんでそれぞれの解釈やそれに伴う実践事例を交流し合う機会をもち、その情報共有を、先生方各々で日々の授業づくりに生かすことが大切です。

技術・家庭科は、これまでもよりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、「生活を工夫し創造する資質・能力」の育成に努めてきました。生徒一人一人が、技術の見方・考え方を働かせて、問題発見や課題解決に向けた実践を通して身に付けた資質・能力が、生活や社会で「いきてはたらく力」となるように、今後も「問題解決的な学習の充実」を継続してください。

(東部教育事務所)

学び続ける教師

部長 柿埜 哲男

本年度の第65回研究大会は、東海・北陸地区研究大会と兼ねての開催となり、『『いきてはたらく力』につながる技術・家庭科の教育の推進』の研究主題のもと、東部地区は富山市立八尾中学校で「これからの生物育成の技術を考えよう」、西部地区は南砺市立福野中学校で「持続可能な社会のためにできることを考えようー再生可能エネルギーの有効利用と環境問題ー」という題材で事前録画による視聴の形でサンフォルテを会場に行われました。技術部員の努力や協力に対しまして、心から敬意を表すとともに深く感謝申し上げます。

さて、本年度は、新学習指導要領が全面实施となり、大きな転換の年度となりました。また、GIGAスクール構想の実現に向けて1人1台学習専用端末が整備され「GIGAスクール元年」とも言える年度となりました。これまで以上にICTを活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた授業改善につなげていく必要があります。このような大きな変化の中において、私たち技術部員にとっての強みは、「D情報の技術」において、社会の変化等に主体的に対応し、常に最先端の技術を吸収して指導に生かしてきたことです。コンピュータ室でやっていることを今後は、全領域に広げていきましょう。

生徒にとって、技術・家庭科の学習を通して身に付けた資質・能力は、知識・技能にとどまらず、「生きる力」に直結すると考えます。まずは、教師自身が自ら学ぶ姿勢をもち、生涯に渡って資質・能力を向上させ続ける姿勢、「学び続ける教師」を目指して日々「切磋琢磨」していくことが大切であると考えます。部員数が年々減少する中、郡市の垣根を越えて、全県一体となって技術教育の推進に協力して取り組んでいく必要があると日々感じています。

(高・芳野中)

第65回研究大会より

第1分科会の授業を終えて

田中 幹人

1年半に渡って取り組んできた本題材で重視した点は、①授業中だけの学びではなく、家庭での実践につなげた点。②実践を通じての学びを次年度のレポートやプレゼンテーションの題材につなげた点。③点数制限のあるレーダーチャートの調整を通じて、各項目につながりがあることを意識した点。④学びを通じて将来の社会につながる生物育成技術の提案をした点。の4点に大別される。提案授業は(③、④)の部分に取り上げられており、「技術の見方・考え方」の各視点から課題を考え、班活動を通じて個人の提案へとつなげた。本題材では、本県の研究主題である「『いきてはたらく力』につながる技術・家庭科の教育の推進」に向け、様々な「つながり」を意識した提案ができたものとする。今回は自分の家庭での栽培経験を基に、3年時では知識を共有する学習を仕組んだことで、2年時の基礎知識習得以降は全て経験と学び合いで授業を進めることができた。生徒が身近な栽培経験から自身にとって必要感のある課題を認識し、深い思考につなげられるよう設定したことは、自らの思考をさらにステップアップし、習得した技術を生活や社会に生かそうとする資質の育成につながるものとする。また、限られた授業時数の中で、実習時間やそれに伴う学びの機会を確保するためには、地域や家庭との連携を密にした授業時間外での取組や題材を複合させるなどの工夫、他教科との連携等が今後の大きな課題である。

結びに、かねてより「生活につながる技術・家庭科の授業や題材はどうあればよいか」という個人の研修課題を設定していた私にとって、今回のような研究の場を与えていただいたことは、修養の深まりと新たな課題設定のためのまたとない機会となった。本研究を進める中で風呂敷を広げすぎたきらいもなくはないが、今後も生徒にとって着実に何かが残る学習を継続的に設定できるよう研究を続けたい。

(富・八尾中)

第2分科会の授業を終えて

川島 正樹

第2分科会「エネルギー変換の技術」では、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を育むことを目指して、授業研究を行った。

授業では、前時までに各自が調べた太陽光発電導入のメリットやデメリットを基に、根拠を明らかにしながら班で互いの意見や考えを伝え合い、自分の考えを再考する学習を展開した。生徒たちの思考のための観点として「技術ものさし」を準備し、「社会からの要求」「安全性」「環境への負荷」「経済性」の4つの観点を中心に自分の考えをまとめた。「社会からの要求」ではパリ協定やSDGsについて、「安全性」では屋根が重くなることによる地震被害や災害時における感電事故について、「環境への負荷」ではソーラーパネルの廃棄問題や温室効果ガスの削減量について、「経済性」ではFIT制度における売電シミュレーションについて調べ、疑問に思ったことはすぐに手元にあるタブレットを利用して確かめていた。生徒たちは、様々な情報から何を重視するのかを考え、班で話し合う中で思考を深め、広げることができた。

授業の最後の発表では、根拠を明らかにして自分たちの班の考えを発表することができた。友達の意見を聞いて、自分の考えが変わった生徒もあり、話し合いの中で新しい気付きが生まれ、考えが深まったと考えられる。また、授業の終末に小水力発電や風力発電、電気自動車などの再生可能エネルギーの利用について資料を提示した。今回の授業での太陽光発電導入以外にも自分ができる地球温暖化対策があること、そしてそれを進めていくことの大切さについて学ぶことができた。

研修会では、各県から授業展開のアイデアや評価について貴重な意見をいただいた。安養主任指導主事からは今後の研究の方向性について指導助言をいただいた。今後の授業改善・授業研究に生かしていきたい。

(南・福野中)

